

「うを」について④

前々号で紹介した18篇の“こふき”資料のうち、②榊井本A（16年本）には、「うを」の同義語として“ぎぎよ”と“人ぎよ”が記されている。また前々号では、すでに「うを」は「鮠魚」でサンショウウオであると紹介し、前号では「鮠魚」は「人魚」とも呼ばれていたと紹介した。

そこで、“人ぎよ”はどのような生き物なのか、「人魚」のことなのか、再び18篇の資料を用いて、“人ぎよ”に相当する表現とその数を集約した。その結果を表1にまとめた。

表1 “こふき”資料ごとに示した“人ぎよ”に相当する異表記名の数。

	表題	ア)	イ)	ウ)	エ)	オ)	カ)	キ)	ク)	ケ)	コ)	サ)	合計
①山田（15年本）	「古記」						1						1
②榊井 A（16年本）	「神代の古記」			2		1							3
③榊井 B（16年本）	「神の古記」	3											3
④上田（16年本）	「神の古記」	3											3
⑤梅谷（16年本）	「神の古記」	3											3
⑥杉田（16年本）	「神の古記」	8											8
⑦不詳 A（16年本）	「神の古記」	3											3
⑧不詳 B（16年本）	「神の古記」	3											3
⑨今村（16年本）	「神の古記」	3											3
⑩喜多（16年本）	「神の古記」	3											3
⑪江本（16年本）	「神乃実古記録文」	3											3
⑫宇野（16年本）	「おはなし」									1			1
⑬前川（17年本）	「神の古記」		2		1								3
⑭旧今村（17年本）	「神の古記」		2					1					3
⑮増井（17年本）	「神の古記」	1											1
⑯井筒（17年本）	「神代古記写」	1								1	1		3
⑰松尾（18年本）	「神の古記」	1			1				1				3
⑱浦田（20年本）	「神の伝里記」	3											3

表1に示したように、“人ぎよ”に相当する表現は、ア) 人魚、イ) 人ぎよふ、ウ) 人ぎよ、エ) にんぎよ、オ) 人ぎよ、カ) 人ぎう、キ) 人げんぎよ、ク) にんぎよ、ケ) にんげよふ、コ) にんげう、サ) にんぎよう、の11種類あった。また、用いられていた表現数は、ア) が38例、イ) が4例、ウ) とエ) が2例、そして残りはすべて1例ずつで、合計53例だった。ここで最も多かった表現は人魚の38例(約70%)で、次いで多かったのは「人ぎよふ」の4例だった。これらを集約すると、おおむね「人魚」という表現にまとめることができた。すなわち、“人ぎよ”は「人魚」を指していると判断することができた。

以上により、“ぎぎよ”は「鮠魚」であり、“人ぎよ”は「人魚」を指し、両者はサンショウウオを意味すると考えた。

“ぎぎよ”は、本当に「サンショウウオ」なのか？

さらにこの疑問を解く文献として、金子圭助氏の『山田伊八郎文書「古記」について』に着目した。この本の中に、「山田伊八郎は…事あるたびに教祖の元へ参り、直接おさしづを仰いだ。伊八郎は教祖から直接聞かして頂いた『こふき話』を、『古記』と題してしたためた」とある。このように、教祖から何回となく直接お聞きしてまとめた①山田本の“こふき”資料は、親神様の御真意をさらに正確に表現されたもの、と考えることができる。

“こふき”に登場する水域棲動物は、幕末から明治にかけて生きていた当時の人たちにとっては、あたりまえに理解できた動物であり、比較的身近な生き物だったに違いない。だからこそ、当時の一般庶民は水域棲動物から「元の理」を理解することが可能だったと考えている。教祖は身近な生き物たちを比喩

的に登場させながら、彼らの特性（生態や形態、行動など）をとおして、人間創造の話や親神様の御真意をわかりやすく説かれたものと考えている。もちろん、「元の理」の話は未来へと続く絶対的真理であり、ここで論議する水域棲動物は、遺伝的変化を伴いながら進化する今日特定の動物を指しているわけでは決していないことも、承知しておかなければならない。

そこで、そのことを踏まえながら「うを」の特性を考慮しつつ、たとえ話として登場する「うを」が当時の人たちにどのような動物として理解されていたのか、本当にサンショウウオが想起されていたのか、さらに検討を進める。

(1) 「うを」の生息地

『天理教教典』第三章「元の理」に「どろ海中を見澄されると、沢山のどじよの中に、うをとみとが混つている」という表現がある。すなわち「どじよ」、「うを」、「み」の三者はよく見澄まさないで判別できないほど姿かたちが似ているか、あるいは似たような生息環境の中で三者は混棲する、というような表現である。同じような表現は、18篇すべての“こふき”資料に記されている。これは「うを」が、「どじよ」即ちドジョウ（泥鰌、図1）と同じような生息環境、つまり、田畑の水たまりや小川を共通の生活場所としている可能性が高い生き物だということを示している。しかも、「かんろふ台の処が魚ト巳ト体のしん」と記されているように、『宿し込みの場所』である「ぢば」の当時の自然環境も考慮することが必要だと考える。

「ぢば」周辺の当時の地形は、青垣の山々から大和の国中へ流れ下る布留川くんなかなどによってできた緩斜面の扇状地だった。しかもその場所は、青垣の山々と平野部との接点にあたる山麓で、生態学的には「林縁部」という森や林の縁にあたる多様な自然環境をなす場所でもあった。

ドジョウは大和盆地に広く分布し、田畑の水たまりで繰り広げられる春の繁殖によって活動を始める。田んぼのあちこちの泥土の中で数匹が塊になって越冬していたドジョウが、4月になると繁殖のために泥土の中から姿を現し、田畑の周りの水路や水たまりへ向かう。その場所は、「畑ドジョウ」と呼ばれるカスミサンショウウオが、繁殖のために利用する水域と同じ場所でもあった。産卵は、カスミサンショウウオと同じように、水面近くでおこない、産んだ卵は水中の草木に産みつける。



図1 腸呼吸をするドジョウ。ドジョウはえら呼吸のほかに口から酸素を吸い込んで腸から吸収し、肛門から二酸化炭素を排出する「腸呼吸」もおこなう。(撮影：桜井淳史氏、『動物の大世界百科』(1973)より)